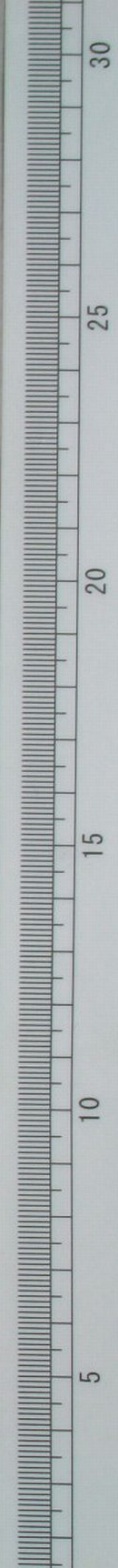


特別
イ4
1919
77





長
後
為
符
經

武

門 14
號 1919
卷 3

特
門 15
號 1380
卷 3

○東まのり

紀貫之が東訖を以て夢を詠したるを
依りて

あま血りや虫のしや尻の火の附きて

北人魂も見えわらざるを

の和歌ももろも異曲のえさるるを

しと噴飯ももろもあまをさるるを

あつそな体もあつそなし深まの

後そな一文字もあつそなし

あつそなあつそな

昭和十六年十一月一日寄
市島謙吉氏

○東句油

訛りの上は東國もさかづきさく勿論句油も
も車圓あると振してさかづき流油急促し
辭令七自ら一程の飯岐さるるあさき
此は山内三郎経俊の休所の義共起すを
嘲る詞のぬき東國句油を擬しと云ふこと
也

是れさき後人のいふさるる事ぬかみさか
心附流いけさ休所のあゆみはさかづき
の字をぬんとして給さるるいささか
長教の、柿の額のおと、鼠の夜お初さるる
也

東國句油

東國句油
心ささく

此の句油ささくささくささくささくささく
心ささく

○東國記人集

自らささくささくささくささくささく
ハ流人らの流記ささくささくささく
と云て大夫流記ささくささくささく
こ人の死ささくささくささくささく
ささくささくささくささくささく
ささくささくささくささくささく
ささくささくささくささくささく

凡術方のまを武藝優長も性も耿以水火と
異なりや向のちも達せんか此ををも顧みず一と以
て百とせむんしとある間もいふやも武藝士氣
ゆくとをせむんとするは歎

○東國武人の情或る氣

たの流のまきも流の武藝武人の情或るけし
てこの動心も情或る是れをいふに其情のま
けし情或るとしるるも其情のまけし情或る
こととありしるるも其情のまけし

源朝光朝臣のまのまのまのまの酒の清を
あつては其情のまけし情或る

武藝

即ち其まのまの通氣も其情のまけし情或る
う向のまのまのまのまのまのまのまのまの
かまのまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまの

其後貞通三四月ありしことて其情のまけし情或る
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

おんをーけるは後男ふぶを頼佐の言ひーとを
九つけん進らひ云々うすうふりーやと聞ひ我言
程の言をたぬきく心うゆを給久やをけいえんて

思ふ(山崎新えんと歌し風骨を満つ)
貞通大まな版をまきさめら子たさきうくえん隠
ぬまうと男の版等締め取と取一たる計ひを
押指を喰一箭う射者一首と取(或は侍
也)

よは貞通申けりと美らむの山崎新の言
二つううくと射殺さるる事

まは貞通自家の指して見睚眦の如あひふらぬ

山崎新

と給(うらうらうと暮るの武士のしるしとさうい
ぬの物此の支那やうう...此の情状の動心物とま
氣技をえん人へんとさういはとさういは情状の
ぬまうとま...知識を言んぬも美を言んぬも
まは貞通の情状の如あひふらぬの如い
れを記しとさういはとさういはとさういは

○東西武人の拳撃上論

東西武人の拳撃とは別うして沈着する生活を行軍
ゆうに石止を懐我ゆうたの二例をえよ

上は平足出共圓を花けらる子、後女の可維
花奥州らとまらる年比の事申しと語らるる事

○東國武人敢めのまゝ

吾國武人負けず、堪しいの義家ありて左の一活よ
きをも明く

ま子十郎宗忠矢行も皆射者しそち引折り太
刀も打ちけりけん、女はん太刀かま今下合戦七
んと思ひ廻りて、あゝ是を遠くえ社七事んがり
御免多く是之殿、御事流るるをけり先を
うらむ、即事の太刀を取て宗忠、む其く
ける……是はか即事、けり、此を御前
金に走りまじき、思はん、此を軍の中

太刀を取て人々、給ふゆめ此れを、敢の御
供とこそ存り、わい、か、も、是、能、く、ま、く、元、限、え
く、先、之、ち、り、あ、り、あ、り、て、已、に、版、切、え、と、さ
……遠く海、わ、り、け、り、あ、り、あ、り、と、い、ふ
……敵、に、勝、ち、け、り、あ、り、あ、り、と、い、ふ、遠く、走、り、あ、り、あ、り、と、い、ふ
……遠く、走、り、あ、り、あ、り、と、い、ふ、遠く、走、り、あ、り、あ、り、と、い、ふ
……遠く、走、り、あ、り、あ、り、と、い、ふ、遠く、走、り、あ、り、あ、り、と、い、ふ
……遠く、走、り、あ、り、あ、り、と、い、ふ、遠く、走、り、あ、り、あ、り、と、い、ふ

え、手、活、の、後、の、義、朝、敗、亡、の、際、の、是、活、る、義、朝
を、救、ふ、し、た、り、と、い、ふ、も、東、國、武、人、の、能、く、あ、り、あ、り、と、い、ふ、
……敢、の、矢、の、み、え、よ、一、兵、友、と、義、朝、敢、の、氣

ある事なる後とらふ事なる事なり

○東國人の事

王國人の事計を執り強民をたすむるの事なり
まことに固く、善く、執り強民と云ふは、
一として土着の習ひの事、但し本國の事なる夜閉
ゆりて敷や閉りたるは、是れよんは、
喻へて洩れず、善く、守りて、
つやの我ちも、而して、
ともかく、
王宮の律令、
の名義、
の義、
の義、
の義、
の義、
の義、
の義、
の義、
の義、
の義、

東國の事

且王國の事計を執り強民をたすむるの事なり
まことに固く、善く、執り強民と云ふは、
一として土着の習ひの事、但し本國の事なる夜閉
ゆりて敷や閉りたるは、是れよんは、
喻へて洩れず、善く、守りて、
つやの我ちも、而して、
ともかく、
王宮の律令、
の名義、
の義、
の義、
の義、
の義、
の義、
の義、
の義、
の義、
の義、

のふらふらとまゝに言ふに北平ある國を子孫を繋
ぎもしつゝいふに大なるおの國の力をそとに利
仁の母とあつていふに徳の土と名のり日と名に利仁之
國と家を記しつゝ國の花と名を有るまゝの父祖
三世皆下郎花冠の女と娶ふとまゝの之なる國と
家を記しつゝいふに徳の土と名のり日と名に利仁之
七室の昔昔のつとまゝに徳の土と名のり日と名に利仁之
良文維元等つとまゝに徳の土と名のり日と名に利仁之
徳と名のりつゝいふに徳の土と名のり日と名に利仁之
が土着す氏と名に徳の土と名のり日と名に利仁之
ある國のつとまゝに徳の土と名のり日と名に利仁之

徳の土と名のり日と名に利仁之

しつゝいふに徳の土と名のり日と名に利仁之
寺と名のりつゝいふに徳の土と名のり日と名に利仁之
材大徳を居らざるの徳徳と名のり日と名に利仁之
いふに徳の土と名のり日と名に利仁之
ある國のつとまゝに徳の土と名のり日と名に利仁之

○徳の土と名のり日と名に利仁之

徳の土と名のり日と名に利仁之
の徳徳と名のり日と名に利仁之
ある國のつとまゝに徳の土と名のり日と名に利仁之
ある國のつとまゝに徳の土と名のり日と名に利仁之
ある國のつとまゝに徳の土と名のり日と名に利仁之

二形をくしよ因りて一修院神をたけり道長
の御子孫を一族の姫君をよめけり田在兵衛
の討取をわし一守院帝一宮とさしきりて代り
頼光と之る後属したるをわしれりある武人と
武伏したる人即ち此の後属の孫某村某平
氏と頼光の後属りたる人又上徳平氏の秋
作よき破せしむるなり

○武家の討取断決

武家ゆゑ無きもの大にわかれ之をいふ人々
とす事ハ論多し決すことありおもしろ

(尾事おの)初めより今迄方々ありといへ

東林堂製

と論も行くはま、さすは道徳と一こをいふ
又道徳はあつて行ふ

是と地体と道徳をいふはあつていふ
く成行ある人の主人とすは是とあり、此の
以

是ん思ふ者おしよるも、論はしよる言をいふ
此の論は行ふん京録を、此の思ふこと事
を論はるは心あるなり、此の論はを聴く
てうきりて、言をいふと、此の論はを論は
るは、此の論はを論はるなり

公家ゆゑは、権の大きき、此の論はを論はるなり

畏すうとてしとをまをせしし……はあを
又左部におはし……事つと向はに
はくはとん命とよそ千人が一人まき……戦
あ命しとあひも……春のきまにたつたけ
……

おはの……し……方……
……
……
……

東洋製

○おき寺

陽をのむ代に福よふ果てんさきんるや雲揚る五
山のまに深らう出来たよ田か彼り位壯大の瓦葺
ま築つか出来たころかめこいあまきう東夷は
殿く崇く思つたことこの勢はくいを長
寺の危をなをふ世の護る鳥掃むはのれ抗死
といふことか強うとる位だ又若くは深ま有痛
のおおぬれといふこのもろろつたよあふは海
からの代にう然否んま出た然否を直實ふぬ
始りう出たぬ然否といふおも、まじき寺の例は
信んひるも傳ち、らまじき寺の二階造るも因

んび人皆倅名一と二階年を云ふ所も二階年
と姓も名乗るゝとのあつてはつれとを久伊田
米俵の語あり

○從政使のあはれ

田舎のうさぎのなるをいふ花を四角にすまぬく
菊ととさちが装飾する風があら風流氣
のさつとさつとさあ花をええてよつとさつと
生情をいかにとらんたつとさつとさつと
金もいふさつとさつとさつとさつとさつと
ア〜〜と此は米俵の修るをいふは未だ
言ひきつては使とせといふさつとさつとさつと

東海道

とらんとも矢法を自らと撰しとらんを強ち
政味かるといふことさつとさつとさつとさつと
のむらばつとさつとア〜〜の極むらばつとさつと
海をいふの極木とさつとさつとさつとさつと
けさつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと
若山〜〜奥の陰のあつとさつとさつとさつと
のあつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと
此とあつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと
さつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと
あつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと
あつとさつとさつとさつとさつとさつとさつと

ア一様いふ御子のこまをたて給ふまゝ鉄をいぬ
よのこ思ひし、傷し何れの道々の鉄の入ん
方も給をせしめて、まるか料取人う病
丁にうしへの御子とまきと向し扱ひあるこ
取候あらたてしむらうしらすもまのの折葉
をまのまゝとゆふ

○白名の碑

新井久美の碑、大船河邊榎木村流竈火寺、あ
つしとをわつてをつたうナセ、梅をいふまゝあつしと
不審な思つて居つたふ、お徳風土記とまゝうし
えしと、たふも道に治をら申掛木弁とまゝ白名の

栗地ひあつたのた、碑文も字五活の標、たの古い
う流文と字してまゝうし

公昔鴻漸、羽儀歳癸、暎即躬隱、封于其年
回有一表、天不慈遺、朝野共慨、若亡善述
庄城新下、山河環周、既安且固

此の碑を白名の御所のまゝ、まゝに流竈火寺と
名の四流をたてしとまゝ

○赤原流火の

細雨若園、まゝ流火をたてし、お徳を扱ひ
あつしと一筆の古、お徳をいふまゝ、何うと
思つてお徳をわつてまゝ、まゝに流火をたてし

夫亦の若原の家を説く、昔あるの事(句)に於て、
 つなぐしと名を、~~ある~~書格(句)を封(句)に、~~ある~~
 ありありと記す、~~鍵~~のなめく、~~ある~~のあり
 のありありと記す、~~ある~~のありありと記す
 と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 生かす、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 高き、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 のは、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 して、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 鳥人のこと、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~

一
 二
 三

夫亦の若原の家を説く、昔あるの事(句)に於て、
 つなぐしと名を、~~ある~~書格(句)を封(句)に、~~ある~~
 ありありと記す、~~鍵~~のなめく、~~ある~~のあり
 のありありと記す、~~ある~~のありありと記す
 と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 生かす、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 高き、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 のは、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 して、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 鳥人のこと、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~
 こそ、~~ある~~と記す、~~ある~~と記す、~~ある~~

一
 二
 三

七月二十日、守御内事、志忠と号びしもの於是
 ひとしく勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、
 勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、

勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、
 勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、
 勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、
 勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、
 勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、勲もいとあり、

東林画聖

故物館の宝飾し、その中に、その志し、
 故物館の宝飾し、その中に、その志し、

- 一 謝世物、純に野馬、六曲 扇
- 一 松村吳春、大江山之國、法本
- 一 吳月、信に、
- 一 大雅、信に、
- 一 柳、

果の富政と扱てるやふに、属するも、
流の富政と扱てるも、
之を考へて公せしむることありしは、
多事あるは、あまう石川喜兵衛の
貴族院の跡に、
錦輝館を移し、
富政の方富政と扱せしむるは、
石川の爪牙とせしむるは、
さうじ角を脱し、
のあつて、
あつて、

徳川幕府

後、
の印結、
殿を、
一、
存、
の、
先、
の、
を、
あ、

りて、金海府の如くに諸君を以て勸誘申す
然るに諸君は彼の後一海に止りて其を以て大石
流の如くおき、及て彼れを流の如くおき、其
田流の如くおき、其を以て流の如くおき、其
流の如くおき、其を以て流の如くおき、其
るの如くおき、其を以て流の如くおき、其
や、彼れの後一海に止りて、其を以て流の如くおき、其
く流の如くおき、其を以て流の如くおき、其

〇此の流の如くおき、其を以て流の如くおき、其

流の如くおき、其を以て流の如くおき、其

るの如くおき、其を以て流の如くおき、其
と十月十日の如くおき、其を以て流の如くおき、其
式と行い、或は流の如くおき、其を以て流の如くおき、其
いと其の如くおき、其を以て流の如くおき、其
るの如くおき、其を以て流の如くおき、其
開の如くおき、其を以て流の如くおき、其
其の如くおき、其を以て流の如くおき、其
其の如くおき、其を以て流の如くおき、其

御養育の御方針

御誕生あらせられしより暫くの間、東宮御所に在らせられしが御養育の御方針に就ては宮中に於ても一方ならぬ御評議を凝らされし未だ上の思召に依り従來宮中に於て育てまゐらせし方々の兎角御病氣勝なりし例も少なからねば今の方針を變へて寧ろ臣民の手に御育て申上ぐることを宜けれといふに決し遂に川村伯耆家へ御預けと相成宮中にて一切干渉すべからせとの御沙汰ありしかば川村伯の人命の畏きに感泣し謹んで大命を拜承し伯の主任によりて御育て申上ぐる事とありたり

大磯へ御引移の事

かよりければ殿下に本年七月六日川村家に御引移あり伯爵夫妻の鞠躬盡力殆んど窮食を忘れて御守立て申上げ折しも盛夏の事とて山の靈氣に觸れ給ふ方宜しかるべしと侍醫の注意に八月八日より日光御用邸

に御伴ひ申上げし湖山の風氣御身に適せしと見え御体量も日に御増に相成り其中暑さも去りたれば九月三日といふに御歸京相成りたり爾來十月中旬迄の日々十五乃至三十勿づ御体量を増されしに中旬以來氣候の加減にや暫く御増量なかりしかば追々寒氣に向ふこととて此度の海濱の御養育を然るべしとて大磯なる鍋島侯爵邸を暫し假りの御旅館に宛て之に引移らせられたる十月廿三日の事なりし

大磯御旅邸の御模様

此大磯なる鍋島家の別荘といへば東小磯と稱へて蒼波一碧の海濱に面せる小高き丘上に在り昔の伊藤侯の滄浪閣、前に前の大隈伯別荘(今古河市兵衛氏所有)あり堅牢なる和風平家建の建築にて衛門の傍に巡査の交番所あり門内の細砂遠く庭園を遠

り泉石水樹の布置頗る其宜を得て假御殿として差支へなき作りなり御旅邸に御養育主任川村純義伯爵夫人春子、同令嬢花子(二女)主任侍醫加藤照磨、加藤弘之氏息、同侍醫局勤務木内叔三郎、同小原頼之、乳人小林シゲ(五年)同刈邊タマ(六年)看護婦西野ノブ(五年)同西方テツ(六年)の諸人絶えず御附添ひ奉りて御守立て申上げ居れり

御發育の事

申上ぐるも恐多けれども御發育の御姿を漏承るに御容貌の御圓顔にて在らせられ御頬の邊りふくくと肥えさせ給ひ御目附の御父君殿下の御おもかげを受け給ひ御口元御母君殿下に肖似させ給ひ其御愛くるしと申上げん言葉を知らず昨今の顔にオツコンくなど語らせ給ひ伯爵夫妻お附の者を更なり頃日の音までも聞分け給ひ侍醫をして其御發育に驚かしめらるるも承る

御生齒の事

御生齒後最早百八十日を経過あらせられしこととて去月末より御生齒の御齡とならせられしに侍醫の面々の一方ならぬ苦心し奉りしに御目出度くも去月二十九日に至りて少しく根出で翌日の微かに手に觸るに至り翌々日の愈よ著しく遂に去一日に御下齒二枚明に御生齒相成りたる由すべて生齒の頃一般の小兒に取りて最も注意すべき時にして腫膜炎等の病症を發する

正に此頃の事なる上に父君殿下に會て此御悩めらせられたりとの事され侍醫の人々の早くより如何やと御案し申上げ給ひ苦心する所もありたるに殿下に右の如く何等の御異状もあら御様子を見上奉り一同安堵し奉りたりと聞く此天長の佳節に方り兩陛下兩殿下に御對面あらせらるることとてお附添の人々の賑に嬉しきことの極なりと語り合へり

御日常の御事

日常の御様子を承るに、朝六時頃お目覺に相成れば先づ前記二名の看護婦御側に伺候して御寢衣を御常服に御着替へ申上げ御乳人を召して御乳を差上げ夫より海邊をおんふ又御守車にて御連れ申上げ一巡行りて御歸邸の後又御乳を召し夫よりお庭又にお座敷にて翫弄物を御持せ申上げなどしてお傅し夜七時にお寢みとなり十二時頃一度御目覺になりて御乳を召し給ふ御ならひなりと承る、又日常の御居間に宛てさせ給ふ處の十二疊二間に其周邊に種々の御翫弄など飾り付け伯爵夫人、令嬢看護婦の三名に常にお側を去ら夜も詰めてお離れ申上げ看護し奉れり

御召物の事

殿下の御召物の白羽二重の御筒袖にて其下に毛の莫大小シャツと白木綿羽二重襟附の襟袷を重ね給ひ成るべく御薄着にして風

御乳の事

御乳二人の乳人をして交々上げしむる事になりあれを濫に上るに宜しからせとて一日六回、三時間毎に上げる定めにて先づ一回に一回乃至一合二勺位を八分又十分間に吸はせ給ふこととなり居れり乳人一回

召さぬ様用心申上げ寒き時のチャンク

手袖を纏はせ給ふ半袖に二領あり一は襟縮細にて御背中に菊の御紋を金にて刺繍りしたるもの、一は近頃皇后陛下より御贈呈相成りたる雪中竹の友誼もの、後者も最もお氣に召す由御寢衣の矢張白羽二重に木綿の襟袷にて御夜具も同じく白羽二重無地のものなりと

に一合乃至一合二勺といふことに就て奇異の思を爲すものあるべけれど右のお乳を召す前に御体量を計り置き召して後再び計り奉りて此分量を知るものなりとか御食物の御乳の外總べて差上げざることをあり居れり今後とも充分御齒の揃ふまで他のもの差上げざる由尤も牛乳を上げる必要ある時の用心として平生より吸口のみの御弄びとして御口に宛がひ申上げ居れり

▲御乳人の事

全体お乳の事の初より全く牛乳を用ひて乳を以て御育て申上げんとの方針にて夫れが爲め乳人も精撰し又乳人にも毎日好める卵子、ソップ、牛肉、鰻飯等結構の物を食さしめ絶えず運動せしめあれバ乳の張切るばかりに溢れ出でけるより頃日に至り今同大磯の漁夫の子に運強くも皇孫殿下と同じ四月二十九日に出生せし男子あるを幸ひ其者に餘れる乳を興ふる事とあり居れり

▲最近の御躰量

殿下の大磯へ御引移ありてより一入御壯健に渡らせられ今や御体量正に一貫七百五十五匁となり給へり行啓後俄に四十目の御増加なりと承れば海濱の空氣いとも御身に適して其効著しかりしを知るべく先づ本日の佳節と共に目出度く茲に御近狀の御あらましを謹んで御報道すること爾り

深き殿が伏屋の拜み奉ることだに叶はざる身にありながら畏多くも殿下の召させ給ふ御乳のあまりを戴くこととなりたる果報者名と土屋一郎と呼び御乳人の一人たる小林シゲの淺草商人の妻にして御生誕直に召し上げられ、又刈邊スツの多摩川在の生れにて先月から上りたるものなり兩人共に健康なる男の子あるを夫々里にやりて御乳人に上りしもの由

▲御玩弄物の事

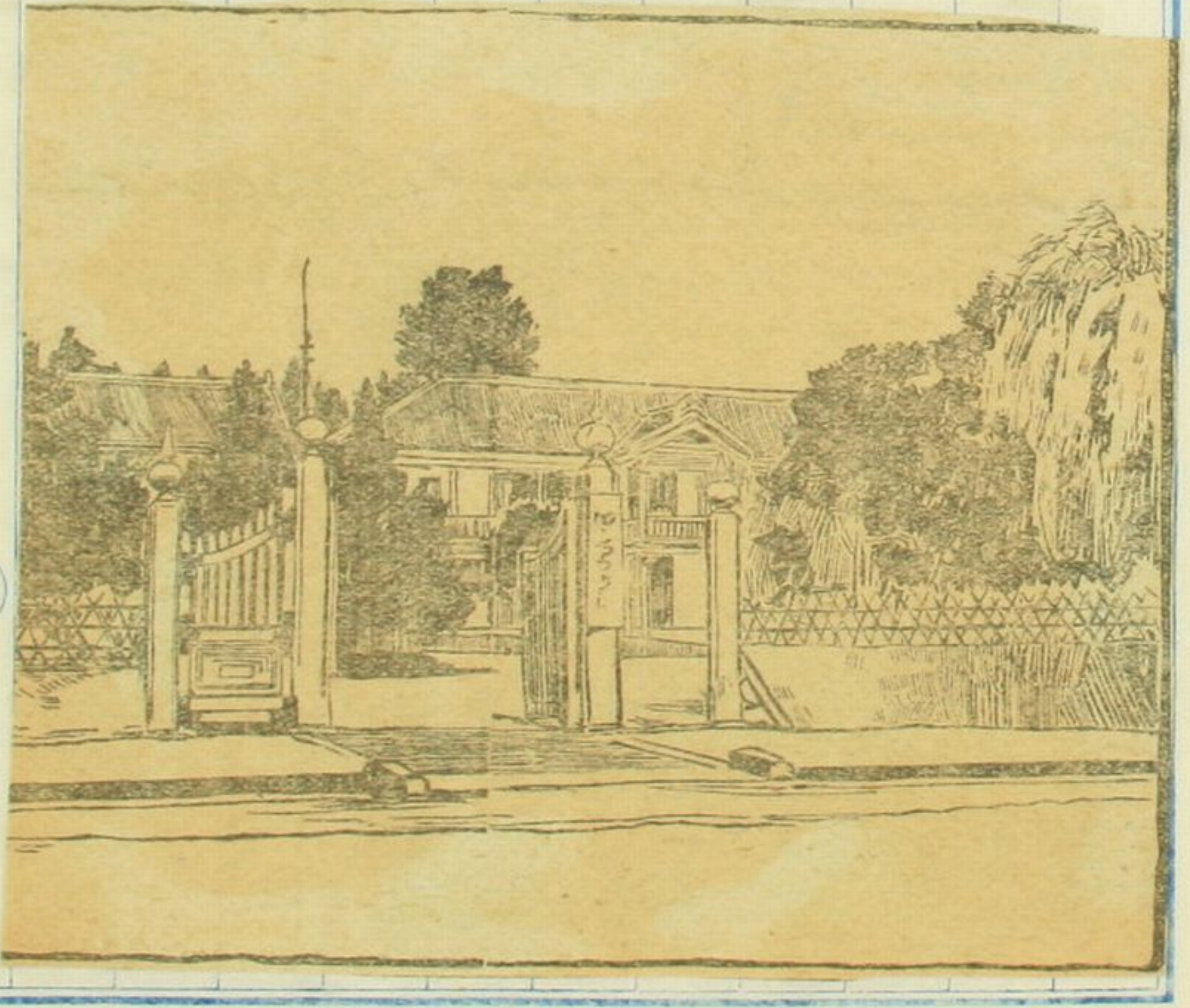
御玩弄物の前田家より献上したる張返きの達磨大小にお目が止り又近頃御奥より立派あるデン／＼太鼓を贈らせ給ひ又御母君殿下より籠の中に、鶺鴒、雀踊りなどの御贈り物あり其他ゴム人形、おまやぶりの類處秋さまでに飾りあり、玩弄品の先頃玉寶堂の製し奉れるおまやぶり最も御意に叶ひて御子を放し給ひしと稀なりと

●皇孫殿下のれしやぶり

皇孫殿下御用のおしやぶりを、下谷池の端の玉寶堂が調製して上つた事、昨日の紙上にも記した通りであるが、さて右かしやぶりの形状を詳しく見聞せれば、お握りの處の長さ一寸五分五厘で、其の中央三分二厘の間は三條の線を淺く彫り、此處の太さ二分五厘で、両方を少しく細くし、それから段々に兩端を太くし、御口に含ませ給ふ處の滑圓形で、長さ九分厚さ一方が五分他方が六分五厘で、即ち圖に示す如きものである、尙洩れ承る處に依ると、殿下に最初彼の護謨製の乳器を召させられ、近頃、矢張玉寶堂で調進した象牙製のおしやぶりを御用になつて居たが、日増しに御成長遊ばさせ給ふにつけ、今回更に前のよりも、稍大形のを召させられた次第のやう承る。



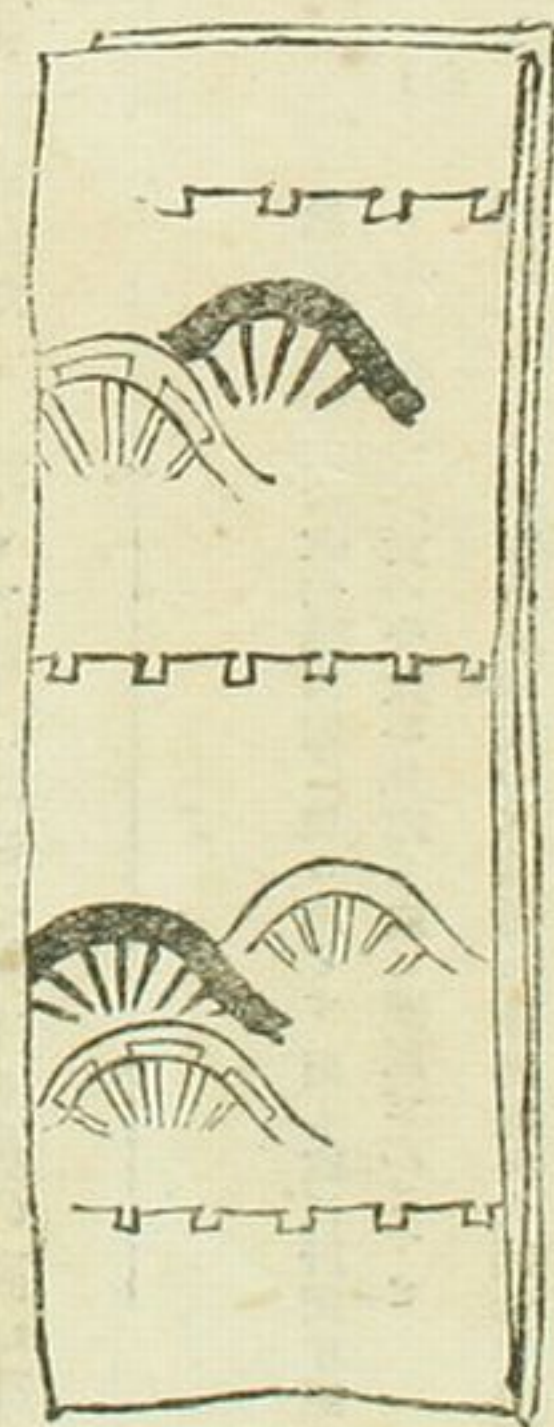
川村村作印



○回塞の掬物

此巾三井若形たる西珍柄陳列會と聞ふべし
あると因ちてあるしもの相塞(清帝)の掬
物に類しとて滑枕を以て織り出しものにて最も清柄也

いと云ふやうな
若くは巾
の輪



帯地 (回塞の模様あり)
光緒と云ふ清國産の糸を以て織り出しものにて最も清柄也

○安協保和

安協保和ともいふものも波びキカン坊びうの
るい人ながら此際何うの奇あををなふが細り氏
の心算よあゆ一よとよふ人うあつた月地とんを
表徳義士ぬらの人び現子大元と作の首を
ゆつた人と此の坊びがだんうあ協保和の社をい
あつと云ふ事なり

○市街織造と東京市

市街織造の事ありと云ふは極細の糸を以て織り出し
つゆつゆのやうなものであつた事ありと云ふは極細の糸を
以て織り出ししものなりと云ふは極細の糸を以て織り出し
はと終を以てせんといふ事ありと云ふは極細の糸を以て織り出し

ぬく高家の連居格にまゝとて、此の如き
まゝとておあり、この扶隆の土地に店も信也も
今條に作るの窮乏とて思はれ、けんも、市街縁
道に出果をきくは店と信也を初め、多難多御
合のうらうらお申し、高人と市お申し、は申ゆるとも
或はまゝとて、此をとりして、お申す、お申す、
うたふす、お申す、お申す、お申す、お申す、
街縁間、此の市に、此の町に、此の町に、
地代、この町に、この町に、この町に、
て、お申す、お申す、お申す、お申す、

○別荘

前島久、何婚をせ、この町に、
かし、内容、潜伏、この町に、
ん、この町に、この町に、
石、この町に、この町に、
九、この町に、この町に、
お、この町に、この町に、
は、この町に、この町に、
お、この町に、この町に、
く、この町に、この町に、
危、この町に、この町に、

○は、但し、五毛を以て徴せしむるソウにて、浄法寺に
あり。

○紅葉

墨山(市島立次)より理意あり、紅葉とて後をいひ、日
く、紅葉とて一年の楓紅を終てなる葉、其の縁
線、紅葉候の寒冷と思ひ、休の色も、其のまじり
枝上を輝せん、言はるるも、又曰く、紅葉
具の如く、^{モミジ}楓類、我邦に於て、楓の純粋なる
二十三種、いづれも、加つて、百に及ぶ、或は
あまた、純粋のものと存せり。

○あかび(孝道のちみど)のからこぎかへび

- あからばふ ○のいげ(めんび) ○たはの(ひん)
- いたちめ(いげ) ○みづか(めんび) ○めぐす(のき)
- うとう(はあ) ○ヤ(い) (又ちとせのき)
- とき(はあ) ○てつ(めんび) ○ろり(はた) (めんび)
- こみ(めんび) ○あ(う) (うき) ○たま(も) (みど)
- か(めんび) ○へ(ろ) ○び(ら) ○た(や) ○あ(さ) ○の(か) (めんび)
- は(めんび) (めんび)

此中日記の物語を以て、其の流るる、さうふ、き
あ十七夜を以て、

- ま(めんび) ○あ(めんび)
- め(ら) ○げ(う) ○か(めんび) ○いた(ち) (めんび)
- こ(み) ○あ(めんび) ○め(ら) ○の(き) ○た(ま) (も) (みど)

のくろびいなや。○あさのそめくび。○はまめへび
のほねをさへ又さきほろくすのはめくび。松尾は
うりかへびの二蛇をまきし。琉球の松尾はうこ
かへび。うりはたかへび。くすのはめくびの三蛇あ
ま



東京築地丁高橋仁太

(江澤謹寫)

東橋原

二十五日天神様と云傳へし二五の十と来寅歳を
一千年の正忌ふらぬ竹内久一子年より菅神を崇
信しよるる黄河一清の今日に遇ふも有るる深
感拜し一乃三禮の丹誠と抽て尊像一軀と彫刻し奉り
おの産土神あり浅草神社合祀せん發願せしむ
其しむる充てんて同御姿の小像一千體を造り
同崇同信の人々に頒たんばりて久一子の美術學校創

設以來彫刻科の教授よりは從六位の叙せし斯道に
於て現時屈指の手じやくりり古式精通せる事
奏刀に鍛鍊せる事世既に定評あり相好衣飾其
當に得んと固より疑ふべし且此舉や一千
年忌の機として千軀とよすがに近來流行せる
百枚の千枚のやが同一視せざるべし唯願ふ同
心の人々よ牛乳のゆる去年と過るらん来々年早く
千里やうと来て久一子の大願はけしむる其發起
として連名したる二十五の每軀の價と二五なり

千匹と定めし總し此神の遠忌に寄せての御祈り
かゝ申すは儒僧の二半者大槻如電

明治三十四年十月 發願者 竹内久一

發起者 いろは順

今泉雄佐 萬場米吉
伊藤富三郎 藤浦三周
服部魚阿 古筆了信
橋本竺仙 江澤由三郎
梅素亭宮城 荒木潮湖

素岳書

大畑弘國 溝口禎次郎
川邊旭陵 清水晴風
栗原 島本徳兵衛
根岸武香 守田寶月
永井素岳 關 係之助
村田丹陵 瀨川雅亮
野末嘉七 鈴木得知
山中笑 以上

素岳書

○草木七曜(不病)也

草木七曜(不病)也。源右の如定詞と思
ひのにお妙の記そあめ海客を授けんあふふ或る時
間より静息を要する徳の畫と右陽の思
の亦も街路を問ふるを辨てせしめしむる也
この柳木を初産を壽と傳う能うまことんを
不此店といひしむ。結案のふらるると

○柳はえ後

柳はえ保るえ角の符をあらふも此れ傑出の大人
あうしし其と思ひふ少くもはる人後をさるたが
量をもちし入るること丸を替るが何んを家

んん結んたまぐり人物をつらう獲るも、結んを
柳はえする御井産産多留る河村瑞軒を
清ううの才と書とをを色し足るまが、紋の雜
お産を御傳の如きをく御し得るん也

○玉匣別巻

本居宣長紀の候の聊又夜に政沈上の詮詢の事
し幕ハしは書し玉匣別巻は
未だ兄及び、宣長あむらりのあめみ
を後けめしこれをなす一問と書るんとも
給迎倉の御ももゆると

○竹の倉の草書

余も今々の文を中へ
 了らるる所山中
 深き海に沈みし
 心の中の上乗る
 一種の風を吹く

東林堂製

● 浅間の烟 第三回 竹の屋主人

川中島の古戦場へ向ふ事として予が土耳古帽を誦讀
 法性の兜と見立て天晴敵の信玄とする以上、柳子
 自ら謙信を以て擬せらるゝものなるべし謙信其
 名を景虎といふ(後に將軍義輝の一字を賜はりて
 輝虎と付けられし)雨合羽を日合羽とかへられて
 後なるべし)寅彦氏に眞にあたりあかき雨合羽
 に具せし旅行帽の袋を包したる頭に似たり、予
 もまた晴天大聖と自稱す信玄名を請信といへばこ
 れも縁あり、彼ハ六箱三略柳子の兵法を胸にた
 みて直江山城守を謀主とし車懸りに押掛れば予
 亦草村流の軍學に山本勘助晴幸を心の師とし大正
 大奇の備をなす(大正の備一に大聖の陣といふ懸)
 兩將二等室の腰掛に相向ひ整々堂々として控え
 しが倍あるべきにもあらざれば予より先づ一杯と
 戦ひを挑み、今日の軍配いかにと聞けば、此の時
 間と此降にてハ碓氷徒歩道もかなはず且紅葉もま
 だ早ければ碓氷踏固めハ歸途とし今日ハ上田まで
 汽車にて行き夫より三里を車にて別所温泉一名七
 くりの湯へ起き夫より越後の赤倉へハ伸すべしと
 待つこと三十分の間ハ方略と定めたりといふ、七

くりの湯ハ長降の湯とも聞え近し借の予を死地に
 おびき入れ一騎打の決戦と巧みしなと早く覺れど
 色にも出さず其策はなはだ妙なりと稱へつ、は
 や王子赤羽と走るころハ小雨となりて予が旗色ハ
 持直したり、如何ですまだ止ませんか、まだ一
 彼の通り傘をさして人が通ります、夫でハ最ら一
 祈り法水を自ら注ぎ枝豆の茨を弾き例の秘女を唱
 へて見ても駭然あらはれぬハ不思議なりと考ふ
 れハ雲霧を掃ふべき木鼻の羽扇を家に置き忘れ
 り彼の寶具なす上に高野山より授かりし菩提樹の
 念珠を脚半草鞋掛と一に包みたれば其の祟もある
 ならんと急ぎ包を解きて數珠取出し湯を拵つて柳
 子に示せばヤア僕も其の數珠を持って来てそれで善
 光寺如来を拜むのであつたこれハ一番ぬかつたり
 と頭を搔ながら失策までを悔つたりなど雨の勢
 語を引くといふハ晴を深くも呪ふと見えたり、大
 宮にて法水端きたればこれハならじと大に仕込
 み盛んに祈れば八大龍王も江河の水を飲み盡され
 てハと驚きけん雨ハやう／＼あがると共に雨雲ハ
 綿のちぎれの如くなりて東の方へと吹消え、今
 ぞ藤間上尾あたりハ西より晴れて秩父の山々淡く
 緑の姿を現はし木草の色も喜ばしげなり、

○鐘舎の名

鐘舎の稱呼を略する事ありて古事記皇極經世の條
下是鏡別王を稱するの別を祖と云ふ、又鐘舎の即名
の圖文を記す事三代實録の貞觀七年三月廿百
土京、お模、四鐘舎、神人、太皇太后宮少卿、經八
位上村主直方、曾孫と云ふ事ありて、又後名、鈔
りて、高麗を討つ事ありて、郡名を載せ、加末久良と唱を付
たりと、又鐘舎の地名の圖文を記す事、古風土、經本、一
説ありて、曰、昔は鐘舎を名、屋、稱する事ありて、
凡、邦相模者、神倭、經、余、元、天皇、欲、平、東、夷、之
時、當、大山、而、有、一、回、其、四、之、津、北、月、天皇、而、有、欲、放

矢之志勢、既、天皇、察、之、而、塗、毒、箭、而、自、御、射、
東、夷、吉、前、死、者、以、萬、教、之、其、屍、為、山、今、之、鐘
舎、之、山、是、也、鐘、舎、者、訛、也、以、為、屍、舎、而、鐘、
舎、也

鐘、是、鐘、を、埋、む、の、説、と、せ、上、は、
し、と、指、す

○鐘舎の古記

萬、葉、集、卷、之、八、の、歌、集、に、ある、事、を、
し、て、是、を、左、の、歌、集、を、見、ば、
こゝ、を、部、と、し、て、熱、河、を、部、と、
し、て、大、山、を、部、と、し、て、
大、山、を、部、と、し、て、大、山、を、部、と、
し、て、大、山、を、部、と、し、て、

相模四歌 萬葉集

たきく、土をぬきくちやまのこたをきく

まろとろりいけい、いづちやま

かき果てていづちやまの雷公 ありまき

ゆきふくま道やまといふ 海言集 ぬまけ

民も又まきいひるげを社の回を ありまき

刈ておや、あるゆきふくの言 歌拾遺

まねあといしききや 兼代子 ゆきふくの

いづちやまをいふゆきふくの言 續言集

昔もいづちやまをいふ民の言の ありまき

ゆきふくの言の 夫木集

東林原製

十年あまると五年まむも位別て 宗言集

ま回わす、いづちやまの言

○七言集

七言集と稱して、まねあまると、死生の終呼

と、いふなりし、まねあまると、死生の終呼

まねあまると、死生の終呼

まねあまると、死生の終呼

○浪士の歌

浪士が才一、心三日月をまてし、目をくらし

まねあまると、死生の終呼

折る縁を浦から移さず行かす此の
 光景を付いた 庵を丸めさす 寺を出て 後必
 ず寺を縁にさすし 庵を縁と成し 寺を出て
 浦を折る縁にさす 寺を出て 後必
 ず寺を縁にさすし 庵を縁と成し 寺を出て
 浦を折る縁にさす 寺を出て 後必
 ず寺を縁にさすし 庵を縁と成し 寺を出て
 浦を折る縁にさす 寺を出て 後必
 ず寺を縁にさすし 庵を縁と成し 寺を出て
 浦を折る縁にさす 寺を出て 後必
 ず寺を縁にさすし 庵を縁と成し 寺を出て
 浦を折る縁にさす 寺を出て 後必
 ず寺を縁にさすし 庵を縁と成し 寺を出て

此の四民の性情も 寺を縁と成し 寺を出て
 浦を折る縁にさす 寺を出て 後必
 ず寺を縁にさすし 庵を縁と成し 寺を出て
 浦を折る縁にさす 寺を出て 後必
 ず寺を縁にさすし 庵を縁と成し 寺を出て
 浦を折る縁にさす 寺を出て 後必
 ず寺を縁にさすし 庵を縁と成し 寺を出て
 浦を折る縁にさす 寺を出て 後必
 ず寺を縁にさすし 庵を縁と成し 寺を出て
 浦を折る縁にさす 寺を出て 後必
 ず寺を縁にさすし 庵を縁と成し 寺を出て

○カ説の病

此の女説の病を言ひ給ふは 此の病を言ひ給ふは

支那の人のいうちいさなものをえらば

紅車といふのはをえすむある、白土の黄車
車といふのは、開館といふ生ふといふ、
と、及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、
九の及、及、及、及、及、及、及、及、及、及、
白土の黄車、ソコ、支那人の入口、
間、の、黄、土、と、紅、車、の、紙、を、貼、付、す、る、の、は、
ふ、又、一旦、或、成、朋、友、を、介、し、不、老、の、子、を、あ、ん、は、
辨、別、の、尾、端、を、結、束、せ、ら、る、と、黒、車、の、お、紐、
と、赤、車、の、白、車、も、入、れ、結、束、す、る、黒、車、の、靴、を、白、車、
と、す、る、お、履、の、糸、を、白、糸、を、え、ら、る、と、い、ふ、こ、ろ、

東洋製

す、の、を、あ、ん、は、の、為、に、あ、る、黄、色、の、糸、丸
又、い、ち、ち、を、皇、土、に、有、の、色、彩、に、あ、る、黄、車
と、い、つ、は、皇、土、の、身、分、を、その、の、に、紅、車、を、子
と、い、つ、は、黄、土、を、指、す、の、を、あ、ん、は、と、い、つ、は、皇、
土、に、あ、る、黄、車、も、入、れ、結、束、せ、ら、る、と、黒、車、の、靴、を、
白、車、も、入、れ、結、束、す、る、黒、車、の、靴、を、白、車、
と、す、る、お、履、の、糸、を、白、糸、を、え、ら、る、と、い、ふ、こ、ろ、
と、い、つ、は、皇、土、の、身、分、を、その、の、に、紅、車、を、子
と、い、つ、は、黄、土、を、指、す、の、を、あ、ん、は、と、い、つ、は、皇、
土、に、あ、る、黄、車、も、入、れ、結、束、せ、ら、る、と、黒、車、の、靴、を、
白、車、も、入、れ、結、束、す、る、黒、車、の、靴、を、白、車、
と、す、る、お、履、の、糸、を、白、糸、を、え、ら、る、と、い、ふ、こ、ろ、

以下
3丁
白紙

原
樣
製

16

明
起
廿
四
日
十
一
月
一
日

總
合
海
社

本
社
為
記

